

寄稿

現代人形劇のはじまり(前編)

人形劇の図書館 瀧見英明

2023年が「現代人形劇の100年」という節目の年だったのですが、ご存じでしたか？

これを読まれる方は、人形劇に関わって、演じていたり、観客だったり、人形劇に興味を持っている方々でしょうけれども、そんなこと知らなかった、聞かなかったな、という方は多いかと思われまます。それは人形劇の世界の中ではあまり話題にならなかったからで、情報が流れてこないから知らないままだったのでしょう。

ところが、「現代人形劇の100年」についての様々な催しは、前年の2022年から2023年度内にかけて、展示7か所、シンポジウムなど5か所、研究発表2か所、講演、講座など3か所と行われています。展示は「人形劇の図書館コレクション」が主ですが、他はいくつかの博物館、学会、大学などが主体です。

その内容はどのようなものだったのか、というのは後で改めて記すとして、まずは「現代人形劇」とは何なのか、というところから話を進めましょう。

現代人形劇とは？

周知の様に日本には歴史と深い内容をもった「人形芝居」の存在があります。北海道でも明治期以降には阿波・淡路から人形浄瑠璃が入ってきたこともあったりして、それが現在の「あしり座」にもつながっているといえ、古くから全国各地に人形芝居が存在し、その種類も人形浄瑠璃に限らずにありとあらゆる構造の人形芝居に驚くほどの数があった、世界に類を見ない人形芝居大国でした。

そんな人形芝居大国になぜわざわざ「人形劇」と称されるものがあるのか、それは人形芝居という流れとは全く違った流れを作り出したからで、数多ある人形芝居とは明確に違う点があるからなのです。何が違うのか、それは西洋の人形劇のカタチを取り入れたことで、一つは、それまで西の観客ではなかった子どもたちをも対象にしたこと、二つが、当時のモダニズムの影響によるもの、といったことが挙げられます。西洋の人形劇のカタチといえるのは、それまでの人形芝居の流れには全くないものだから、あえて「人形劇」として称することになったのです。

1923(大正12)年に、それは動き始めるのですが、まったく唐突におこったものではなく前史といえる流れが存在します。1894(明治27)年に、初めて西洋人形劇が日本にやってきて、評判をとりまます。「ダーク人形座」といわれているのがそれで、英国のヴィクトリア朝時代の代表的人形劇の一つで、居留地だけでなく横浜、東京、神戸で演じ、3年後に再来日し、さらに広範囲な各地でも上演し、

その影響は歌舞伎にも取り入れられるほどの評判だったようです。

子どものための人形劇と新興芸術の人形劇

それから30年程後の1923年、現代人形劇の流れの始まりは、まず幼稚園という場で「子どものための人形劇」が演じられました。文部省の派遣で欧州の幼稚園教育の実際を研修し帰ってきたばかりの倉橋惣三が、東京女子高等師範学校附属幼稚園の子どもたちに教員たちの「お茶の水人形座」が「ギニョール」(片手遣い人形)による舞台を見せたのです。園児は人形劇に大きな反応を見せました。それはパリあたりの公園の人形劇場で目の当たりにした、舞台の中に同化せんばかりの反応と同様で、倉橋はこれを日本中の子どもたちにもと、幼稚園教育の中で展開していきます。これが人形芝居にはなかった「子どものための人形劇」の最初です。

そして、偶然にもこの同じ年1923年の秋、当時の若き芸術家たち、千田是也、伊藤熹朔の兄弟(二人は後に新劇の演出家、舞台装置家として大成します)を中心に上野の美校、音楽学校などの学生たちが「人形座試演会」を行い、センセーショナルといえる評判で、一躍「マリオネット」という言葉が知られるようになります。彼らは当時のモダニズムという世界的な流れに興った「新興美術(芸術)運動」が、美術だけでなく音楽、演劇、舞踊、文芸などジャンルを超えた芸術家の卵たちへの影響、さらに当時世界的な影響をもたらしていた西洋哲学的演劇論とでもいえるゴードン・クレイグの「Über-Marionette」(超・マリオネット)の影響が膨らんで、「マリオネット」による新しい舞台表現に取り組んだのでした。これが「新興芸術の人形劇」で、いわば芸術至上的な動きでもあったといえます。

こうして西洋の人形劇のカタチであった「ギニョール」「マリオネット」と二つの流れが別々に100年前に動き始めたというわけです。でも、まったく対象も、きっかけもまるで違う動きが、子どもたちという新たな観客が鍵になって、やがて重なっていくことで「現代人形劇」と呼ばれるようになっていきました。(続く)

瀧見 英明(かたみ えいめい)

京都生まれ育ちの、人形劇に55年ほどつづりの人形つかい。小さな子どもたちを主たる対象の、人形劇・トロッコを主宰、日本で唯一の人形劇専門図書館も創設、運営しています。また、現代人形劇を中心にして、東北の猿倉人形芝居などの研究者。さらに国際人形劇フェスなどの企画制作など幅広い。



障害のある子どもない子どもみんなで創る ～人形劇によるソーシャルインクルージョンの取り組み

■日曜日の午前中、子どもたちが中島児童会館に集まってくる

札幌市の中心部に位置する緑豊かな中島公園。その公園の中には、長い間、市民に愛されている「札幌市中島児童会館」と「札幌市こども人形劇場こぐま座」があります。この2つの施設は、公立として日本で初めてできた児童会館と人形劇専門劇場です。そこには月に2回、日曜日の午前中になるといろんな子どもたちが集まってきます。朝一番に来て元気な声で「おはよう!」と挨拶する子、眠たそうに挨拶もそこそこに入ってくる子、楽しくて仕方がない様子の飛び跳ねてくる子、なにかのキャラクターに変身してやってくる子、「おまたせ!」って言いながら入ってくる子(笑)、ゆっくりゆっくりした足取りの子、声は出ないけどニコッと笑う子など。小学1年生から高校3年生までのさまざまな特性を持った子どもたちがワクワク感を持ってやって来てくれます。

これは中島児童会館とこぐま座が、令和5年度新たにスタートした『パペットアートヴィレッジ』(以下、Pヴィレッジ)です。「共にあそぶ、共につくる」をテーマに、障害のある子どもない子ども、子どもも大人も、いろんな人たちがごちゃまぜになり、創造活動を行うソーシャルインクルー

ジョン事業。人形劇を中心に音楽やダンス、工作や絵画、そしてあそびを通して、みんなと一緒に世界でたった一つの宝物を創りあげるこの企画は、子どもたちのやりたい、やってみたくを大切に取組んできました。

■パペットアートヴィレッジのとある一日～子どもたちの「やりたい」をカタチに

札幌もすっかり雪景色となった12月上旬。7月から全10回のプログラムで実施してきたPヴィレッジもいよいよ大詰めに入ってきました。最後の集大成『おたのしみクリスマス会』の準備です。人形劇場こぐま座を会場に、お客様を入れての発表会を行います。今回のプログラムは、手づくり楽器を持ったパレード、歌と踊り、巻き絵ばなし、そしてメインの人形劇という豪華プログラム。子どもたちにとっても大人にとっても初めての発表会。ドキドキワクワクしながらも子どもたちは公演の準備のために大忙しです。

まずはみんな準備運動のラジオ体操から始まり、Pヴィレッジオリジナルソング「ごちゃまぜだいすき」の歌と踊りの練習です。子どもたちの好きな食べ物や動物など、なんでもかんでも、ごちゃまぜにしたこの歌は、今回のスタッフ兼音楽監督でもあるY幡さん(子どもたちからは亀仙人と呼ばれています(笑))の作曲。み

んなの大好きなテーマソングとなりました。曲がかかると子どもたちは自然と体が動きだします。おもしろい歌詞に合わせて、ダンス指導のI田さんによるおもしろい振り付け。健常児やダウン症の子、自閉スペクトラム症、ADHA …いろんな子どもたちが自分の運動能力に合わせて、一生懸命に真剣かつ笑顔で踊っています。大人にとっては少し難しいかなと思うダンスも、子どもたちは難なく覚えてしまいます。子どもと大人が一緒になって踊ることも、この事業の楽しさでもあります。しかし、どうしてもお母さんから離れられずにいつも踊れない小学1年のEちゃん。障害はありませんが、とても人見知り。みんなの前で体を動かすことは苦手ですが、工作や絵画にはものすごく積極的です。この時も無理をさせず、踊りたくなったら踊ればいい、いつか踊ってくれる日が来ればいいな、そんなスタンスです。(続く)

R6『パペットアートヴィレッジ』参加者募集!
6/23～1/19(全11回) お問合せはこぐま座まで

矢吹 英孝(やぶき ひでたか)

福島県出身。北海道教育大学函館分校卒業。現在、公財)さっぽろ青少年女性活動協会こども若者事業部長。国際人形劇連盟日本ウニマ理事、さっぽろ人形浄瑠璃あしり座代表、人形劇団野良犬Plus®代表



ほん MA・SO・BO シェルジュ HON-CIERGE

本のご案内「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ①

岸 春江(きし はるえ)

フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士
自宅に約3000冊の絵本を所有
主宰の絵本部「ファンタジア」は2019年 北海道読書推進運動協議会 「優良読書グループ 奨励賞」受賞



『きたきつねとはるのいのち』

手島圭三郎 / 絵本塾出版

3月、まだ雪深い山に住む北きつねが巣穴から出てきます。そこで目にするものは、ひぐま・あかげら・モモンガにゆきうさぎなど北海道のいきものたちです。どの姿も厳しい冬を生き抜いた欲びに溢れているのです。1982年に木版画絵本作家としてデビューした手島圭三郎さんは、毎日のように森へ出かけ、何枚ものスケッチをしながら絵本の中にもリアリティを追及してきました。そして、40冊目になるこの作品を最後にします。制作時86歳でありながら、力強い魂が込められた木版画絵本は、背景ひとつひとつにまで命が吹き込まれています。厳しい環境の中でたくましく生き抜く野生動物の姿を見届けながら、読み手も幸せになる読後感です。



『さくららら』

升井純子 文 / 小寺卓矢 写真 / アリス館

「わたしがさく日は、わたしがきめる」。5月中旬になってもまだ咲かないさくらちゃんは、小鳥たちや周りの木々から「ねむりすぎ」と言われます。でも、そんなことは気にしない。太陽の光を浴び、地面からの温かさをしっかりと感じてから花を開くの。「これがわたし」。その潔さに清々しさを感じます。写真の桜は豪雪地の朱鞠内湖畔で育つシマザクラ。着想後、主人公にふさわしい桜に出会うまで時間がかかり、発刊までに7年の歳月を要したそうです。まさに文と絵本が重なります。新しいスタートをきる方へのプレゼントとして。あるいは自分自身の決意表明として持っていたい一冊です。



編集後記

「人形劇の図書館」(滋賀県)ご存じですか? 恥ずかしながら人形劇の歴史を深掘りすることなくきた私…(汗) 濁見さんのお話を読ませていただきもっと知りたい! と興味津々です。また、障害のある子どもたちと共に創る表現活動のレポートや北海道ゆかりの作家さんに焦点をあてた本シェルジュなど新年度も賑やかに走ります～札幌はようやく雪解けが進み春到来です!(柳本)

お問い合わせ

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからご覧いただけます。

